書評

山西商人の研究
——明代における商人および商業資本——

寺田隆信著

昭和四十七年十一月　京都　東洋史研究會
A5版　本文四一三頁　索引一〇頁

一

中國商業史に對する組織的研究は、東亞同文會や臨時臺灣舊慣調査會の調査より起算すれば、すでに六・七十年來の蓄積を備えており、中國經濟史研究の中では相對的にみて先進的な領域を成すと見ることができる。しかし個々の事實の定立はともかく、中國文明史の中で商業の定位を考え、比重を論じ、意義を問うとなれば、なお明證を缺く幾多の問題が、例えば基幹商品の生産・流通機構、都市・市場の構造、交通運輸の技術と組織、流通組織、貨幣信用制度、經營形態、資本の性格、物價史、度量衡史、人口と社會移動の推移などの個々の分野においても充分に究明されておらず、史料學自體も不備であり、體系的論理性をもった研究は緒に就いたばかりであることを認めざるを得ない。中國商業史の研究には幾多の本來的な困難が存在するが、對象自體に備わる獨自性、不透明性、淵源の古さに加えて、つねに政治や文化價値を優先し、しかも農村に寄食しつづけてきた中國社會にあっては、債權關係の如き私法的發達や商工業者の如き社會勢力の伸長について、それらが蔽うべからざる社會的事實に成長した時點においてすら、まとまりある直截な記錄を歷史叙述の上に留める機會が乏しかった事情も考慮されねばならない。研究狀況および史料狀況がかかるものであるとすれば、限定された範圍に愼重に止る研究のみが確實な史料を傳えることが事實であるにしても、廣いパースペクティヴと體系的目的的な史料處理が伴なわなければ、問題の深化は生れてこない。その際比較經濟史的類推方法が有效な思考の枠組を提供することは、過去の例に照して明らかであるが、それは同時に經濟、政治、軍事、社會、技術にわたる横斷的かつ内面的な理解と長期の展望、史料についての習熟に支えられて、その效用を發揮するであろう事は言うまでもない。

本書の著者寺田隆信氏は堅實な實證的學風で周知な學究であり、明清社會經濟史研究の第一線にあって着實に業績を積上げて來られた。氏の關心は商業に限らず、廣く生産と分配、王朝の補給、勞働の組織にも及ぶが、それらの成果を、過去二十年來中心課題として專攻した山西・陝西を本據とする商人集團、いわゆる「山西商人」の綜合的研究に結晶せしめたものが本書である。氏は宮崎市定氏の講義に示唆を得て此の課題に取組み、藤井宏氏の新安商人の研究から多くの啓發を受け、また田村實造、佐伯富氏の良き指導を得てこの勞作を完成した。ところで、山西商人の如き特定地方を根據として、地緣血緣のゲノッセンシャフトリッヒな紐帶を利して外界に發

展する社會現象は、古來、植民定住、都市移住など社會的移動の諸局面に隨伴して踏襲されてきたパターンである。商業史の上でも商人集團の沿革はいわば客商の出現と共に古いに相違ないが、これが明確な形で史上に現れるのは經濟的社會的成長、國内商業の興隆が著しくなった宋代以降、とくに明清時代であるといわれる。その意味で此の問題の研究は、社會的移動（モビリティ）の深層の解明、企業形態、資本の性格、市場の擴がりの測定にとって貴重な手懸りを提供するものである。各種商人集團の存在とその重要性については、すでに根岸佶氏が達觀的な展望を下しているが、その後、大谷孝太郎、傅衣凌、藤井宏、佐々木正哉、西里喜行氏らの研究で、個別に問題が深められてきた。就中藤井氏の新安商人の研究は、中國社會の商業化の劃期を考え、市場の構造、資本の形態と機能を分析するという明確な意圖の下に、體系的網羅的な史料蒐集と近代的概念による史料處理を行なったもので、重要な橋頭堡ともいうべき業績であった。この結果、華中華南を中心とする商業界の實情は大きく解明されたが、新安商人の有力なライバルとして華北・華中の商業に勢力を揮った山西商人については、衞聚賢、郝樹侯、高叔康、陳其田、佐伯富、傅衣凌諸氏の業績は存するものの、主として史料的隘路に阻まれて研究は清代の山西票號に集中し、明代の生成段階についての包括的研究は未出であった。寺田氏の本書はこのような狀況を克服すべく、周到な史料蒐集に基いて明代の山西商人の實像を再構成し、前近代的資本の形成と機能についての新たな知識を提出しようとするもので、中國商業史研究の前進のための重要な礎石であることは疑いない。因みに本書作成に當って、著者は六十名近い先人の業績を渉獵し、百四十餘種の文献を讀破し、政書、編年、類書、文集、傳記、雜記、小說、方志等々を活用して餘す所がない。本書は優に明代華北商業史のための史料ガイドとしても利用できる實質を具えているといえよう。

二

本書の構成は山西商人の研究と、補論としての蘇州踹布業の研究とから成る。内容の要目を示せば左の如くである。

序　章　基本的問題點の考察
第一章　北邊における軍事的消費地帶の經濟構造
第二章　開中法の展開
第三章　北邊における米穀市場の構造と商業利潤の展開
第四章　北邊における商業活動の諸側面
第五章　「山西商人」の系譜
第六章　商業書にみる商人と商業
終　章　「山西商人」の歷史的性格—明代から清代へ—
補　論　蘇州踹布業の經營形態

序章「基本的問題點の考察」は著者自らのフレーム・オブ・レファレンスの說明に充てられている。戰后、停滯性理論の克服をめざす研究が一時期の課題となり、近代の前史に當る明清の社會構成における自生的發展契機の存否をめぐるポレミークが展開し、その成果として、農業の商業化、農工分離の現象を通じて商品生產の事實が確認され、さらに事實上の賃勞働者、不在地主、問屋制前貸等が立證された。著者はこれらの成果が、零細經營と自給自足的經濟を中國社會の停滯的特質と主張しつづけてきた舊說を覆したメリットを評價しながらも、それらが西歐中近世史の發展原理に比較の絕

對的基準をおき、中國社會に內在する近代化への主體的契機とその連續性を積極的に展望していないことに不滿を表明する。著者はむしろ、資本の系譜學を論ずるに當っても、中國社會の歷史的發展と構造が獨自にいかなる性質の市場を、また資本を發生せしめたかを、史料の證言を通して具體的に究明することが急務であり、その檢證方法として前近代資本の運動法則、つまり分業の一定の展開に基づきつつも、生產、交通の未發達を利して行なわれる讓渡利潤抽出の具體過程、その詐欺性、收奪性、寄生性の認識、を思考の枠組に用意する。この著者の方法的意圖は本書の全篇を通じて一貫しており、それなりに說得的ではあるが、同時に問題も存する所である。第一に商業化の質的性格を問うに當っては、市場の政治的構造や前近代資本の運動法則一般以外にも、例えば加藤繁氏や藤井氏らが論證に意を用いられた流通、市場組織の深化、或いは星斌夫氏らが究明された交通運輸の發達程度、等の標識も照合項目に加えられてよいのではないか、第二に資本の運動法則自體がすでに西歐的現象から抽象された假說であるとすれば、技術史或いは廣義の文明史による限定を伴なわねば、氏の意圖する歷史具體性の分析手段としては、餘りに一般的であり、循環論證の惧れなしとしないのではないか。このような一般的質問は氏の眞意に反するかも知れないが、一つの示唆として考慮に加えていただければ幸いである。

第一章「北邊における軍事的消費地帶の經濟構造」は、淸水泰次、藤井、佐伯氏らの學說史を消化した上で、邊餉問題をトータルに包括的、組織的に硏究し、華北における生產と補給に關る物資の移動が、すぐれて政治的性質を有していたこと、補給の體制が自給主義から民間の流通機構への依存に轉換する經緯が立證される。まず達觀的にみて補給の手段は屯田粮、民運粮・開中法、京運銀の四方法を並用したが、孰れが基幹的であったかは補給の條件や年代で異り、速斷を許さぬものの、率ね上揭の順序で消長し、とくに民運粮の比重が高かった。民運粮は後背地たる華北諸省の稅粮を農民の負擔で邊鎭に輸送させるもので、輸送の困難に阻まれて正德以降銀納化した。京運銀は京庫から年例に邊鎭に支給される軍事費による購入で、正統間に成立、アルタン汗の侵入以降急增し、また屯田粮は軍屯、商屯、民屯による現地の穀物生產に賴るもので軍屯が主體をなすが、永樂を最盛期として縮少して行った。その理由は屯田が物權化して私占され、大土地經營が進むと共に、邊餉問題を直接自給する體制が崩れて、流通機構に依存するに至ったためであるとされる。

第二章「開中法の展開」は、邊餉の商業依存の樞要なチャンネルとなった開中法の硏究である。宋の折中法に淵源し、明一代の鹽法の主體であった開中法とは、粮草を邊倉に入納した商人が倉鈔の支給を受け、これを鹽運司、鹽課司に持參して鹽引を受領し、鹽場に赴いて鹽を受け、指定行鹽地內に賣るもので、當初は民運糧、屯田糧に對して臨時的、補助的補給手段であった。しかし臨時性は放慢性につながり、鹽生產額を超過する倉鈔の濫發は、正統以後、代理人への鹽の支給を認めまた成化末いらい現地納糧・納銀制から、鹽運・鹽課司における納銀制への變化が生じ、商人は邊境で納糧開中に應ずる土著の邊商と、兩淮・兩浙の運司に納銀開中する內商に分化した。邊境から內地へ活動の場を移した內商の資本は莫大であり、嘉靖以后、在邊開中の再開と共に、邊商の鹽引の轉買、買いたたきによって巨利を占め、囤戶と稱する獨占的鹽商人となり、萬曆

末の鹽政綱法の施行によって鹽引獨占の地位を一層强固にしたが、その主力は山西・新安商人によって構成された。ところで開中は本來、鹽引と米穀ないし銀との交換によって成立するものであるから、邊地の穀物需給、穀價、また鹽の產額、品質、行鹽地への輸送コスト等の條件が交換比を決定し、當然人口密集せる先進地を行鹽區とする兩淮鹽が有利であり、重視された。在邊開中から運司納銀開中に變ると、當初の交換關係が崩れ、引價が一時急騰して財政收入が增え、商人も遠隔地輸送の困難から解放されたが、引價は漸て固定して邊地の穀價との相關性を失いはじめ、邊穀の價格の動搖に對する計劃的な統制は困難となった。さて商人の納める邊穀の來源は、內地產穀の販入よりもむしろ北邊の屯田の產穀にあり、國初以來大規模に行なわれた商屯が運司納銀制によって衰退したあとは、軍屯を私占する有力者や軍人の國穀に對する商人の投機的購入が活潑となった。

第三章　「北邊における米穀市場の構造と商業利潤の展開」は北邊における米穀を中心とする物資の移動が、駐留軍士の消費を購買力として成立する特殊軍事・政治的性格の市場を形成し、銀納化を契機に全國的な國內商業との關りを深めた事を論ずる。卽ち邊地における米穀はじめ棉布、鹽、農具、硝石、硫黃の恒常的消費は、大多數を商人の補給に仰がねばならず、各邊鎭城堡は商業都市の實質を備えた。とくに補給が銀の流通を媒介とするや、大量に放出される銀は商業活動を吸引刺戟し、その範圍を擴大した。江南產穀は陝西產穀よりも安價に北邊に供給され、商人の利潤抽出の機會と範圍は擴大した。

第四章　「北邊における商業活動の諸側面」はこの商業活動を棉布・鹽の流通をめぐって實證する。百七十萬に上る常備軍の消費する棉布五・六百萬疋、棉花二・三百萬斤は、華北とくに山東の折糧棉布百萬餘疋による補給のほかは、主產地蘇松地方より布商とくに山陝商人を通じて調達され、莫大な護渡利潤をもたらした。一方、一邊鎭當り數十萬石の米穀、約十萬兩の銀の納入を命ずる開中法も商業利潤の大源泉であった。運司納銀制によって邊商、內商、水商の機能分化を生ずると、延綏商人の如き邊商は倉鈔を外商に轉賣せざるを得ず、外商は邊商への資金提供、鹽引購入によって開中權を獨占したが、山西商人はこのような融資を通じて邊商を支配し巨利を積むに至った。

第五章「『山西商人』の系譜」は、山西商人と總稱される商人集團の具體的分析である。「山西商人」は山西の平陽、澤州、潞安、蒲州、汾州等の西南部と大同等と、陝西の西安府三原縣、延安綏德州等を主たる出身地とする商人集團に對するやや漠然たる總稱である。「商籍」における量的比重からは陝西が斷然多いが、商人の出身地は兩省の各地方に廣く分布していたと見るべきである。「山西商人」の活動領域は江北の華北華中を中心に全國に足跡が及び、業種も穀物商、鹽商、絹織物商、布商、運輸商、木材商、典當商ほか雜貨、鐵、茶、染料、家畜、野菜等多彩である。兩淮、長蘆、山東、河東の行鹽區における綱商の中で「山西商人」の勢力は卓越しているが、とくに兩淮鹽商の中での地位は絕大であった。兩淮への進出は弘治頃に始まり、倭寇防衞に商兵五百名を義擧し、一族使用人數千名に達するほどの勢力を築いた。據點は揚州にあり、運司納銀制と共に內商となり、萬曆末の鹽政綱法と共に綱冊に名を列ねる獨占商人となった。彼らの致富のパターンは、農業に從事した祖先

が、商業に轉じて資本を蓄え、揚州に進出して致富し、一族を援助して官界・學界への進出をはかる途が一般的であった。彼等の經營規模は巨大で、數十萬兩の富でなければ富商とは呼ばれなかった。資本の集中の一特徴は合夥の形成であり、多數の出資者が數人の夥計に經營を一任し、夥計は資金の運用者として忠實に職務を遂行し、身股の名で利益の配當に預った。標準的な合夥の經營資金は意外に少額であり、かつ同鄉關係のみが集中の機緣ではないが、鹽商の如き大經營は傘下の小經營の支店網を包攝し、支配人的人物が參加したようである。官僚との結合は「山西商人」の經營上の他の一特色で、大商人の家系の分析は儒商の一體化、特權の享有をめぐる相補の關係を如實に示している。最後に「山西商人」自體は、商業によって地位の上昇をはかる彼等の社會的行動を主體的にいかに評價していたのか。史料の證言によれば、當時の社會は富の追求、商業を甚しく賤視してはいなかった。むしろ道義に基く利潤の追求は道德的行爲とすら評價され、勤儉、不欺、信賴等の德目を備えた商人は善賈であり、社會的必要であった。それにしても讀書應擧を一義的、農商を二義的とする社會的移動の階梯への認識は不變で、盛んに捐官が行なわれた。この限りで體制への寄生と依存という本質は明らかであった。

第六章「商業書にみる商人と商業」は三臺萬用正宗・商旅門（客商規鑒論）、士商要覽等の商業手引書を通じてみた商人の行動規範、商人像の考察である。經驗的な商業知識を集成した實務書であるので、勤勉、誠實等の業務上の德目を重視し、商機の掌握、商略の習熟、經營の合理性、堅實性等、舊商業の機構内での可能な合理性の發揮が說かれ、また對人關係の要素が内外について重要であると主張されるが、一方商人獨自の行動規範を社會一般に押し擴げ公的認知を得ようとする方向は消極的であったと指摘される。

終章「『山西商人』の歷史的性格」は、以上の考察の總括と清代への展望である。邊餉政策が銀兩流通を媒介するものに轉換して以後、國家的需要にもとずく大規模な交換關係が成立し、流通過程に介在する前期的商人の利潤抽出の機會と範圍が擴大し、詐欺的、搾取的、權力寄生的な商業活動を營んだ。新安商人にあっては土地への投資はむしろ回避される傾向があったが、山西商人は積極的に土地に投資し、この限りで一層舊型の社會經濟狀況を背景としていた。清代においてもこの致富形態は變らず、終始特權的寄生的商人の典型として活躍をつづけたことは、中國商業の前期性、保守性が根强く持續していたことを證明していると結んでいる。

補論「蘇州踹布業の經營形態」は、新出の『江蘇省明清以來碑刻資料選集』に收められた蘇州の棉布のつや出し業における經營關係史料の分析であり、著者の舊說であるマニュファクチュア說を修正すると共に、布商―踹匠の中間に介在する包頭の請負勞働制を重視し、布商が踹匠を問屋制的に充分掌握しない狀況が包頭制の存在理由であるとして、横山英氏が商業の生產部門支配を積極評價する點を批判している。これについては東洋史研究第三十一卷第三號に著者の見解が詳細に表明されているので論及するに及ばないだろう。

三

以上の如く、本書は山西商人の歷史的存在狀況の實像を再構成することを意圖しつつも、關連的に幅廣く體系的な史料蒐集と觀察を行ない、政商の出現を可能ならしめた市場機構、致富の條件、また

かかる狀況の持續性を究明しようとしている。これは從來の研究がとかく商業の質的變化の證明に意を用い、商業關係を一般經濟史の問題構成に還元する傾向があったのに對し、大統一帝國の存在とその軍事行政の補給という廣い文明史的視點に立ち歸ってトータルに評價を下そうとするものである。恐らく著者が最も苦心を拂われたのは、この包括的な問題提起の中で山西商人の實像をどう浮び上らせるかにあったであろう。このため行政、軍事、財政、經濟、社會に亘る關係資料が博搜され、愼重に客觀的合理的な解釋を導き出そうとする態度が全篇に見られる。本書の叙述が訓詁的、考證的にほぼ正確であることは、楊聯陞氏の書評（食貨三卷二期一九七三年）でも賞揚されており、多言を要しないであろう。ただ望蜀の希望を付するならば、著者が山西商人に關する基本問題はほとんど觸れたと稱されるにもかかわらず、なお若干の問題點を指摘する餘地がある。例えば本書とほぼ同時に刊行された香港中文大學の李龍華氏の『明代的開中法』（中文大學中國文化研究所學報四卷二期一九七一年）は、開中法についての數量處理を伴った網羅的包括的研究で、運司納銀制以後も北邊の納糧開中は存在した等、寺田氏と同意見の箇所も多いが、全漢昇氏の近作「明代北邊米糧價格的變動」（新亞學報九卷二期）、「宋明間白銀購買力的變動及其原因」（新亞學報八卷一期）、兩氏合著「明中葉後太倉歲入銀兩的研究」（香港中文大學中國文化研究所學報五卷一期）などの銀流通史、米穀市場の詳細な研究に基いているだけに、分析は詳密を極めている。寺田氏が國內の學說史研究史に限らず海外にも視野を開かれることが期待される。同樣に商人の社會的擡頭については、劃期的業績として周知の何炳棣氏 The Ladder of Success in Imperial China, Aspects of Social Mobility: 1368—1911, Columbia University Press, 1962. があり、中國社會の上昇下降の社會的移動について、商業もその一環として幅廣く考察し山西商人にも言及しており、同氏 "The Salt Merchant of Yang-chou, A Study of Commercial Capitalism in Eighteenth Century China", HJAS, June, 1954 と共に參照すべきである。さらに宋代では北邊の百萬前後の軍士の補給を租稅の支移のほか、漕運、糴買、和預買絹等で賄ったが、商業への依存が大きく茶商の比重が高く、漕運の額も大きかった、明朝が曲りなりにも北邊の拓植と現地調達を建前とした背景にいかなる農業、交通、商業の技術進化が存在したのであろうか、また山根幸夫、百瀨宏、石原潤氏らが明らかにした如き、華北の農村市場網の成熟は國內商業と無緣ではない筈であるが、前期商業の法則以外にも、このような變化を問題に組込む餘地はないだろうか。また日野開三郎氏の最近の邸店の研究のごとき、商業の組織面での技術的進化も重要な課題であり、唐宋いらい先進的商業技術の保持者としての山西・陝西商人の傳統は日野氏や宮崎市定氏も觸れておられる。寺田氏は勿論これらの問題を充分意識しておられるに相違ないが、あえて筆者なりの視點から蛇足を付した。本書の刊行を機に寺田氏がますます未知の領域を開拓し、中國經濟史の基底的事實が解明されてゆくことを願って止まない。

（斯波義信）